関西美学音楽学論叢　第 3 巻第 2 分冊・第 4 巻　2020 年
Kansai Journal of Aesthetics and Musicology, Vol. 3-(II), Vol. 4, 2020

「エステティック・ターン」と「日常美学」
“Aesthetic Turn” and “Everyday Aesthetics”

外山　悠
Haruka TOYAMA

要旨

本稿は、2000 年代以降に米国を中心に起こった比較的新たな美学運動である「日常美学」での諸議論と、近年の美学における「エステティック・ターン」と呼ばれる概念との比較考察を行うものである。本稿で扱う「エステティック・ターン」とは、ヴォルフガング・ヴェルシュとリチャード・シュスターマンが共に唱えたものであり、今日の文化的生活の中で美的（エステティック）な側面がしばしば私たちの知覚や経験の基礎となっているという状況を指している。「エステティック・ターン」と「日常美学」は、日常生活や大衆文化の中に「美的（エステティック）なもの」を認め、それらを美学の文脈において論じるという点で共通しているようにみえる。しかし「エステティック・ターン」の語が現代の「日常」の「唯美化」を示しているのに対して、「日常美学」の中にはそのような「唯美化」に反対する動きがみられる。

はじめに

「日常美学（Everyday Aesthetics）」は、現代美学の一潮流として、米国を中心に 2005 年以降[1]その学問的傾向を顕著にしてきている。本論での考察に先立ち、近年ドイツにおいても「日常美学」に類する美学的研究が見られることと、「日常美学」の成立についてフランスのカルチュラル・スタディーズからの流れが考えられることに簡単に触れておきたい。ドイツではルトガー・シュヴァルテ（Ludger Schwarte）が日常的な時間の姿の美しさの判断を可能にする美学を示そうとしている[2]。シュヴァルテはハイデガーの時間論に「日常的なもの」からの解釈を加えるとともに、ウィトゲンシュタイン以来の美学は芸術哲学的傾向から決別しその対象が不在となる時期を迎えているとし、新たに美学的考察の対象となり得る「日常」の内容を示している[3]。一方フランスでは、リュス・ジアール（Luce Giard）

---

[1] この年に米国では「日常美学」をテーマとした論集『日常生活の美学』（Andrew Light and Jonathan M. Smith (ed.), *The Aesthetics of Everyday Life*, New York: Columbia University Press, 2005）が発表された。

[2] Ludger Schwarte, „Ästhetik als Ideologie des Schönen Alltags “, in: *Zeitschrift für Ästhetik und Allgemeine Kunstwissenschaft*, Band 54, Heft 2, hg. v. Josef Früchtl und Maria Moog-Grünewald, Hamburg: Felix Meiner Verlag, 2009, S. 59-74.

[3] ハイデガーは現存在を日常から引き離したことで知られるが、これについてシュヴァルテは現存在の特質にこそ日常的なるものの時間性が現われるはずであるという新たな解釈を加える。またシュヴァルテの美学の対象となる「日常」の内容としては、マルティン・ゼー

が「料理をすること“faire-la-cuisine”（“doing-cooking”）」[4]において日常生活の実践論とも言うべきものを示していたが、ベン・ハイモア（Ben Highmore）はこれをデューイによって示された「平凡な経験」の抽象性を補うものとした[5]。この「平凡さ」という概念は米国の「日常美学」の考察の出発点でもある。

以上のように「日常美学」の学問的背景が明らかになってきているが、本稿はそれを問うものではなく、現在スウェーデンのウプサラ大学で美学教授を務めるラーシュ＝オロフ・アールバーグ（Lars-Olof Åhlberg）による分析[6]を手かがりに、近年の美学における「エステティック・ターン」すなわち「美的（感性論的）転回」[7]と呼ばれる美学概念と、「日常美学」において見られる諸議論との共通点ならびに相違を明らかにしようとするものである。アールバーグは、一方はポストモダンにおいてトランスカルチャーの美学を、他方は米国のプラグマティズムの美学を代表する現代の美学者である、ヴォルフガング・ヴェルシュ（Wolfgang Welsch）とリチャード・シュスターマン（Richard Shusterman）のいう「エステティック・ターン」の分析を行っている。

アールバーグの考察は「日常美学」と直接的に関連するものではないが、「日常美学」における諸問題の中に「エステティック・ターン」との類似する点があるとすれば、次の 2 点を予め述べることができるのではないだろうか。まず、「日常美学」は、しばしば「美的な

ル（Martin Seel）やゲルノート・ベーメ（Gernot Böhme）らによる（自然）環境への関心や、テリー・イーグルトン（Terry Eagleton）のいうイデオロギーが挙げられている。

[4] Luce Giard, « Faire la Cuisine », dans Michel de Certeau, Luce Giard et Pierre Mayol, *L'invention du Quotidien, II, Habiter, Cuisiner*, Paris: Gallimard, 1994, p. 214. (trans. Timothy J. Tomasik, “Doing-Cooking”, in *The Practice of Everyday Life, Volume 2: Living and Cooking*, Minneapolis: The University of Minnesota Press, 1998, p. 150).

[5] ハイモアは、デューイが平凡で日常的な経験の特徴とした「全体の統一の欠如」を「日常」に特有の概念と捉え直す。またハイモアは、デューイによる日常的な経験の記述は「あまりに抽象的」であり「内容（contents）を加える」べきものであると述べ、日常的な経験の「内容」としてジアールによって論じられた「料理をすること」を挙げている（Ben Highmore, “Homework: Routine, Social Aesthetics and the Ambiguity of Everyday Life”, in *Cultural Studies*, 18(2-3), 2004, pp. 306-327）。

[6] Lars-Olof Åhlberg, “Aesthetics, Philosophy of Culture and “the Aesthetic Turn””, in *Filozofski Vestnik*, 22(2), 2001, pp. 21-42.

[7] 本稿で取り扱う「エステティック・ターン」という語は、次の 2 つの動きを指す。すなわち、現代の文化の中であらゆるものが「唯美化」されているという動きと、美学を「感性的認識の学」へと引き戻そうとする動きである。小田部胤久は「美学は前世紀の 80 年代頃から、美学の語源がギリシア語で「感性」を意味する「アイステーシス」のうちにあることに基づいて、〈感性論的転回（the aisthetic turn）〉を遂げつつある」とし、ヴェルシュやベーメによる「エステティック・ターン」を「感性論的転回」と訳出している（小田部胤久「ライプニッツからの感性論＝美学 ――微小表象論の射程――」、『第 62 回美学会全国大会「たそがれフォーラム＠仙台」発表報告集』、第 62 回美学会全国大会実行委員会、2012 年、27 頁）。本稿で扱う「エステティック・ターン」は、これに加えて「唯美化」も指している。したがって本稿では「エステティック・ターン」を「美的（感性論的）転回」と訳出する。

もの」をその原義である「感性的なもの」へと引き戻そうとする美学であるといわれているが、「エステティック・ターン」の語もまた、美学におけるこのような動きを指して用いられる。次に、斎藤百合子によって提唱された「日常美学」による「エステティック・パラダイム・シフト（aesthetic paradigm shift）」[8]という概念が挙げられる。「シフト」の語は、「ターン（転回）」との類似性を思わせる。

Ⅰでは、アールバーグによる分析を参照し、ヴェルシュおよびシュスターマンにおける「エステティック・ターン」の内容を確認する。Ⅱでは、「エステティック・ターン」は、「日常美学」に見られる美的なものから快適ないし感性的なものへという美学の中心概念の転向とどの程度共通するものであるのかを明らかにする。

Ⅰ．ヴェルシュおよびシュスターマンにおける「エステティック・ターン」

アールバーグの引用するところでは、ヴェルシュとシュスターマンは、2000 年にウプサラ大学の人文社会科学部によって開催された「人文学復興の共同プログラム」の中での「文化分析と現代批評」と題されたプログラムの中で「美的（感性論的）転回」の内容と背景について以下のように述べている。

> 今日の哲学的美学において頻繁に用いられる語が「エステティック・ターン」である。換言すれば、美的側面を私たちの現実の知覚と経験の構成の主要かつ根本的なものと見なす傾向が高まっている。……芸術の伝統的な範囲の外へと向かう美的（感性論的）な次元のこの深化と拡張は、新しく重要な研究課題を伴う美的（感性論的）な諸規範（the aesthetic disciplines）に直面している[9]。

ヴェルシュとシュスターマンのいう「エステティック・ターン」とは、私たちがその中に暮らしている現代文化において、「美的側面」が知覚や経験の基礎となってきていて、その結果として「美的（感性論的）次元」の広がりが見られるということを示す。そのとき「美的（感性論的）」とは何を指しているのか。アールバーグによる引用の中で、ヴェルシュとシュスターマンは、今日の日常における「エステティック・ターン」を、モラリティ（morality）とライフスタイル（life style）の「唯美化（aestheticization）」[10]を含むものであるとし次のように続ける。

---

[8] Yuriko Saito, *Aesthetics of the Familiar: Everyday Life and World-Making*, Oxford: Oxford University Press, 2017, p. 204.
[9] “Aesthetics, Philosophy of Culture and “the Aesthetic Turn””, p. 27.
[10] 「唯美化」の訳語は、大森淳史に従うものであり、大森はこの訳語によって「非-美的なものが美的につくられる、ないし美的に受け取られる」ことを示している（ヴォルフガング・ヴェルシュ、大森淳史訳「美学を越えた美学 Ästhetik außerhalb der Ästhetik――この学問分野の新たな形のために――」（第 47 回美学会全国大会での講演原稿、『フィロカリア』第 15 号、大阪大学文学部、1998 年、28 頁）。

モラリティとライフスタイルの唯美化は現代文化に独特の特色であるとたびたびいわれる。伝統的な美学理論では……その範囲がファイン・アートや純文学に制限されていた一方、現代の美学はそれらと同様に日常生活や大衆文化を含むためその範囲を広げている。このことはまさに「美的なもの」という観念が或る変容を経たことを意味する[11]。

またアールバーグは、このような「美的なもの」が遂げてきている「ファイン・アートや純文学」だけでなく「日常生活や大衆文化」を含むという変容を、「「(快い) 感覚や知覚に属する」「感覚的質」という意味での「美的なもの」を認めることに由来する」と捉えている[12]。さらに、「エステティック・ターン」において、「美的なもの」の一側面である「感性的なもの」が「「美的なもの」の他の側面……特に「芸術的なもの」の側面を犠牲にして」支配的なものとなっているとまで述べている[13]。

「モラリティとライフスタイルの「唯美化」」の中で美化の対象となるものは何か。また「唯美化」とはどのような状態になることを指しているのか。以下では、ヴェルシュとシュスターマンのいう「唯美化」の内容を確認する。

Ⅰ-1. ヴェルシュによるライフスタイルの「唯美化」

アールバーグは、ヴェルシュが今日の世界において「美的なものは全てではないとしてもほとんどの「私たちのポストモダンの現代世界」の生活や文化の領域に広がっている」ことから、「「美学を越えた美学」、学際的な「トランス・エステティクス」としての美学」を提唱したことを紹介している[14]。この「美的なもの」が広がる「生活や文化の領域」について、ヴェルシュは 1996 年の日本での美学会全国大会の講演で次のような具体例を挙げている。「美容院やフィットネスクラブで彼らはその身体の美的完璧化を、瞑想コースや新世代セミナーではその精神の美化を推し進め、マナースクールでは美的に望ましい立ち振る舞いを訓練」する[15]。このようにヴェルシュは現在の私たちの日常生活におけるさまざまな美化

---

[11] “Aesthetics, Philosophy of Culture and “the Aesthetic Turn””, p. 28.
[12] Ibid., p. 29.
[13] Ibid.
[14] Ibid., p. 39. ただしヴェルシュは「美学を超えた美学」について次のように説明している。「唯美化」が進められた世界では、美が「遍く存在する」ようになるためにその価値を失うだろうし、さらにやがて私たちは世界が美的なものに覆われることでそのしつこさにうんざりしたり恐怖さえ感じたりするかもしれない。それらから逃れるために「美的無関心」つまり「美的なもの」の拒否がひとつの戦略となると考えられ、逆説的に他の学問分野に目を向ける美学へと至ることになる（「美学を越えた美学 Ästhetik außerhalb der Ästhetik――この学問分野の新たな形のために――」、7-8 頁）。
[15] 同書、5 頁。

の形式を示し、それによって「生活や文化の領域」が「唯美化」されてゆくということを示している。

Ⅰ-2. シュスターマンによる「倫理的なもの（the ethical）の唯美化」

アールバーグは、シュスターマンのいう「「倫理的なものの唯美化」[16]（「モラリティ」の唯美化）[17]において、「美的」とは何を意味するのかを明らかにしようとしている。

まずアールバーグは、シュスターマンのいう「倫理的なものの唯美化」の対象について、次のようなシュスターマンの文章を引用している。「おそらくわれわれの毎日の生活やわれわれの文化の中の大衆的想像力の中にこそ明らかであって、アカデミックな哲学の中にではない」[18]。「性的魅力と欲求充足、言い換えれば個人の容姿と豊かさこそ、われわれの頭の中をいっぱいにしている」ことに、「倫理的なものの唯美化」は明らかに現われている」[19]。アールバーグの引用に補足をするならば、この「われわれの毎日の生活やわれわれの文化の中の大衆的想像力の中にこそ明らか」な「倫理的なものの唯美化」について、シュスターマンは「われわれはキリストのまねびをしようとはあまりしないけれど、マドンナの化粧やファッションをまねしようとはするだろう」[20]といった例を挙げている。

次にアールバーグは、「倫理的なものの唯美化」の背景についてのシュスターマンの見解を紹介する。すなわちシュスターマンによれば、現代の世界において「一つの倫理学を正当化できる内在的基礎が不在である以上、自らにもっとも訴えかけてくるものをそれとして選ぶよう促されたとしてもおかしくない」、「そうした訴えかけを、究極には美的な問題、す

---

16 Richard Shusterman, *Pragmatist Aesthetics: Living Beauty, Rethinking Art*, Oxford: Blackwell, 1992（秋庭史典訳、『ポピュラー芸術の美学――プラグマティズムの立場から』、勁草書房、1999 年）

17 シュスターマンは「主に価値観に関わる倫理学」と「義務に関わる道徳」として「倫理的なもの」と「道徳的なもの（モラリティ）」を区別しているが、現代の「倫理的なものの唯美化」を経た世界について次のように述べている。「もはやそれは、より一般的な義務や義務のグループからの演繹でも、義務の明確な階層的秩序に基づく論理的計算の結果でもない。同様に、倫理学的正当化が美学的説明に似てくるようになるのは、相手を説得しようとする際の三段論法やアルゴリズムに訴えるからではなく、知覚による説得的論証に訴えるからなのだ」（*Pragmatist Aesthetics: Living Beauty, Rethinking Art*, p. 243、『ポピュラー芸術の美学――プラグマティズムの立場から』、239 頁）。ここで最初に述べられている「義務」とは道徳的義務を指している。このことからアールバーグは、ここにはほとんど気づかれないものであるが「道徳的義務」から「倫理的正当化」への転換が見られるとし、シュスターマンは「道徳的なもの」を「倫理的なもの」と同様に「唯美化」の対象と見なしているとする（“Aesthetics, Philosophy of Culture and “the Aesthetic Turn””, p. 32）。論者はこの解釈に沿い、シュスターマンは「倫理的なもの」と「道徳的なもの」を同様に「唯美化」の対象と見なしていると解する。

18 *Pragmatist Aesthetics: Living Beauty, Rethinking Art*, p. 238.（『ポピュラー芸術の美学――プラグマティズムの立場から』、226 頁）。

19 *Ibid.*（同書）。

20 *Ibid.*（同書、227 頁）。

なわち、もっとも魅力的で完全なものとしてわれわれを打つのは何かという問いであると考えることには、説得力があるのだ」[21]。最後に、アールバーグは「倫理的なものの唯美化」における「もっともその場に相応しくてわれわれに訴えかける形態」とは、「どのような観点から」、「「もっともその場に相応しくてわれわれに訴えかける」ものであるのかという問いを立てる。そして、それは「道徳的観点から」であるのか、あるいは「美的観点から」であるのかという二者択一を迫る。アールバーグによれば、その答えが「道徳的観点から」であるのならば私たちはトートロジーを扱っていることになる。しかしまた答えが「「美的観点から」であるのならば、そのとき私たちは唯美化された倫理学またはモラリティを持っているのではなく、倫理学またはモラリティを完全に放棄している」[22]。

ヴェルシュおよびシュスターマンによる「エステティック・ターン」に見られる、美学と他の学問的領域、特に倫理学との関係の変動を、アールバーグの論考に基づいて紹介してきた。シュスターマンのいう「倫理的なものの唯美化」においては「唯美化された倫理学（モラリティ）」が存在するのではなく倫理学またはモラリティが完全に放棄されているというアールバーグの見解に本稿は従う。

Ⅱ．「エステティック・ターン」と「日常美学」

本章では、これまで本稿で扱ってきた「エステティック・ターン」と、主に米国での「日常美学」で起こっている美学的問題との共通点および相違点を明らかにする。

Ⅱ-1. 「エステティック・ターン」と「感性的なもの」の美学としての「日常美学」

「日常美学」とは、日常生活における「美的（感性的）なもの」を美学の領域に組み入れようとするものである。またその支持者らはバウムガルテンが「美学（aesthetica）」を「感性的認識の学」と定義したことにたびたび言及し、「日常美学」とは美学をそのような原義へと引き戻そうとするものであるとしてきた[23]。ただし、日常生活における「感性的なもの」のうちの何を「日常美学」の対象とするのかについては、「日常美学」研究者らの間で以下のような相違がみられる。

まず、トーマス・レディ（Thomas Leddy）は、「日常美学」とは日常的な領域における「快（the pleasure）」や「快適さ」を伴う経験に目を向けるものであるとしている[24]。レデ

---

[21] *Ibid.*, p. 243.（同書、239 頁）。
[22] “Aesthetics, Philosophy of Culture and “the Aesthetic Turn””, pp. 33-34.
[23] このようなバウムガルテンによる美学の原義への言及は、アーノルド・バーリアント（Arnord Berleant, *Sensibility and Sense: The Aesthetic Transformation of the Human World*, Exeter: Imprint Academic, 2010）、ハイモア（“Homework: Routine, Social Aesthetics and the Ambiguity of Everyday Life”）、斎藤（*Aesthetics of the Familiar: Everyday Life and World-Making*）などに見られる。
[24] Thomas Leddy, “The Nature of Everyday Aesthetics”, in *The Aesthetics of Everyday Life*, p. 5.

ィと同様の立場を取る「日常美学」研究者は他にも見られる。アルト・ハーパラ（Alto Haapala）は、「日常美学」は日常の「快い諸側面（pleasurable aspects）」により意識を向けるべきであると主張する[25]。またシェリー・アーヴィン（Sherri Irvin）は、美学とポジティヴな経験を同一視している[26]。

アーノルド・バーリアント（Arnord Berleant）は、日常生活を自らの美学の対象の一部とする社会美学者であり、著作『感受性と感覚：人間世界の美的な変容』の第 9 章で「日常生活のネガティヴ・エステティクス（the negative aesthetics of everyday life）」を主唱する[27]。バーリアントはレディらによる「快適さ」を中心とする「日常美学」に異を唱え、私たちの感覚に訴えポジティヴな反応を起こさせるものだけでなくネガティヴな反応を起こさせるものをも、(「日常生活の美学」の対象としての) 感性的なもののうちに含めている[28]。

そして斎藤の「日常美学」では、快適さでも不快さでもない（ポジティヴでもネガティヴでもない）「平凡さ」といった第三の領域とも言うべきものまでもが感性的（エステティック）なもののうちに含まれている。斎藤は日々の家事や日課といった、ほとんど高尚な思考や深遠な美的経験につながることのない経験であっても、それらは「感性に訴えかける（sensuous）」」経験である限りすべて「日常美学」の対象となり得るとしている[29]。

日常的な事物が持つ感性にとってポジティヴな質だけでなく、それと同様にネガティヴな質やさらには平凡さといった質が「日常美学」の新たな問題意識を発生させている。それらはヴェルシュおよびシュスターマンによる「エステティック・ターン」での「感性的なもの」への回帰には見出されなかったものである。

Ⅱ-2. 「エステティック・ターン」と「エステティック・パラダイム・シフト」

「エステティック・パラダイム・シフト」とは、『身近なものの美学』の中で斎藤が示した概念である[30]。斎藤のいうエステティック・パラダイムとは何を指しているのか、またそれがシフト（転換）するとはいかなる状態を指しているのか。斎藤は自然環境保護運動を例に論を進める。

斎藤によれば、現代の世界ではしばしば「大衆的な美的趣味」によって自然環境が蝕まれている。例えば「緑の芝生を好む」という大衆的な美的趣味を満足させるために大量の農薬

---

[25] Alto Haapala, “On the Aesthetics of the Everyday: Familiarity, Strangeness, and the Meaning of Place”, in *The Aesthetics of Everyday Life*, p. 52.
[26] Sherri Irvin, “The Pervasiveness of the Aesthetic in Ordinary Experience”, in *British Journal of Aesthetics* 48 (1), 2008, p. 41.
[27] *Sensibility and Sense: The Aesthetic Transformation of the Human World*, p. 155.
[28] バーリアントによれば、感性的なものの領域には、快い感覚的質だけでなく、「不満を起こさせる、苦痛を与える、邪悪な、さらには害を与えるやり方（unsatisfying, painful, perverse, or even destructive ways）」によって生じる、ネガティヴな反応を起こさせるものも含まれる（*Ibid.*）。
[29] *Aesthetics of the Familiar: Everyday Life and World-Making*, p. 122.
[30] *Ibid.*, pp. 104-108.

が用いられ、そのことは自然環境に悪影響を及ぼしている。つまり現状では、「緑の芝生を好む」というエステティック・パラダイムが存在し、その優越のために自然環境保護がおろそかになっている。斎藤は、「緑の芝生を好む」という現在のエステティック・パラダイムを、より自然環境保護への配慮がなされているものの見た目には鮮やかではない芝生を支持するようなエステティック・パラダイムへとシフトさせる方法を考察する。斎藤は既存のものに変わる新たなエステティック・パラダイムとして、デイヴィッド・オア（David Orr）による「どこか別の場所あるいは後の時代で醜さを引き起こさないもの」[31]を示す。すなわち、たとえあるものが慣習的な感覚の中でただちに私たちにとって美しいものではないとしても、他の場所や後の時代でポジティヴな美的価値を生むということによって、そのものにはポジティヴな美的評価が与えられ得るという可能性を斎藤は示している。このとき、エステティック・パラダイム・シフトは新たな価値が加わることによって達成されている。斎藤はより自然環境保護に役立つという新たな価値観を加えることによって、鮮やかな緑ではない芝生の外観を支持するという新たな「エステティック・パラダイム」が生まれる可能性を示している。これは、モラリティなど他の諸価値よりも美的なものが優越することを示す「エステティック・ターン」に対する、つまり世界の唯美化に相対する方向へのパラダイム・シフトであると考えられ、斎藤はそのような「エステティック・ターン」に対する批判的視点を持っていると思われる[32]。

おわりに

本稿は、「エステティック・ターン」と、主に米国での「日常美学」との共通点および相違点を示そうとするものであった。一見すると両者は大衆文化や日常生活に目を向け、それらを美学の領域に加えることで既存の「美的（感性的）なもの」の領域を広げようとする点において共通している。しかし「日常美学」には、ごく一般的な美的趣味を、「エステティック・ターン」に伴う「唯美化」と反対の方向へとシフトさせようとする動きが見られた。次に、そのような「エステティック・パラダイム・シフト」と、幅広い「感性的なもの」を扱うという「日常美学」の問題意識との関連が問われることになるが、これについては今後の考察対象としたい。

---

[31] David Orr, *The Nature of Design: Ecology, Culture, and Human Intention*, Oxford: Oxford University Press, 2002, p. 134.

[32] このような特に自然環境保護の観点からの現代の世界に対する批判的視点は、「日常美学」支持者にしばしば見られる。例えばアーヴィンは日常的な快い性質に気づきそれらを味わうことで大量消費や環境破壊を抑えられるのではないかと提案する（“The Pervasiveness of the Aesthetic in Ordinary Experience”, pp. 41-42）。